

聖書箇所：第一サムエル記 30章 21～31節

説教題：共に同じく分け合う神

1 もし公平さが失われたなら

私たちは、日々の暮らしのなかで、何が公平なのかを考えながら生活しています。たとえば、スーパーに買い物に行ってレジに並ぶとき、どこに並ぶか。列の一番後ろですね。もしも列の途中で割り込もうとするなら、先に並んでいた人から強く非難されるでしょう。横入りは公平ではないからです。公平という原則が破られそうになると、人々は強い危機感を覚えます。今日の箇所は、分捕り物をどのように分配すべきかが問題になっていて、まさに公平ということが大きなテーマになっております。

ここまでのあらすじを少しふり返ります。ダビデとその仲間達が留守をしていた間に村が盗賊に襲われ、家族全員が連れ去られてしまう事件が起きました。ダビデと六百人の部下たちはすぐに盗賊を追いかけます。しかし、村が襲われてから時間が経過していますから、かなり無理をしないと追いつくことはできません。ベソル川というところまで来たときには、六百人のうち二百人が疲れ果ててしまい前に進むことができなくなり、そこで脱落してしまいます。ダビデは、残る四百人で盗賊たちの後を追跡し、なんとか無事に連れ去られた家族を取り戻すことができました。

2 世の公平と神の公平

問題はそこからです。盗賊から多くの分捕り物を奪ってきました。それをどう分けるべ

きなのか。そのことが議論になりました。体力があつて最後までダビデといっしょに行動を共にしていた人たちの中から、こんな声が上がりました。22節。「彼らはいっしょに行かなかったのだから、われわれが取り戻した分捕り者を、彼らに分けてやるわけにはいかない。ただ、めいめい自分の妻と子どもを連れて行くのがよい。」

皆さんはこの提案をどう思われるでしょう。ダビデと行動を共にした四百人は命をかけて略奪隊と戦ってきました。大変な苦勞をしたことは確かです。一方、途中で力尽きてしまって脱落した人たちは、ベソル川で荷物の番をしていただけ。命がけで努力した人と、そうでない人。分け前が同じでよいのか。何が公平であるかを考えれば、当然苦勞した人たちが報酬をもらうべきである。戦いに行った人も、行かなかった人もみんな報酬は同じということにしたなら、がんばった人の努力はどうやって報われるのか。この言い分に賛成の方は結構いるのではないかと思います。

この場面は、日本の戦国時代とそっくりです。戦争が終わると軍のリーダーは部下を全員呼び、論功行賞を行います。戦いで功績のあった者を皆の前で褒め、功績に応じて領地を分け与える。そのような会議です。もしリーダーが部下に対し功績に応じたボーナスを与えなかったなら、おそらく反乱が起きるでしょう。それが世の常識です。

この話の結論はどうなったのでしょうか。ダビデは人々の前でこのように決めました。23

節。「兄弟たちよ。主が私たちに賜った物を、そのようにしはならない。主が私たちを守り、私たちに襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。だが、このことについて、あなたがたの言うことを聞かざるうか。戦いに下った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。共に同じく分け合わなければならない。」

ひとことと言えば、戦いに行った人も行かなかった人も、分け前はみな同じにしなさい。これは意外な結論です。ダビデは、体力がなくて脱落していった人たちにあまりにも肩入れしすぎているのではないか。そんなふうに思いたくなります。

でも 25 節に、「その日以来、ダビデはこれをイスラエルのおきてとし、定めとした。今日でもそうである」とあります。その時思いついて、かわいそうだからやってあげたということではありません。絶対に譲れない真理がここにあると確信してやっています。それはなんであったのか。次に見ます。

3 安否を尋ねるダビデ

その前に一つだけ、この箇所がどんな順番で話が進んでいるかを確認しておきます。まず 21 節を読みます。「ダビデが、疲れてダビデについてくることができずにベソル川のほとりにとどまっていた二百人の者のところに来たとき、彼らはダビデと彼に従った者たちを迎えに出て来た。ダビデはこの人たちに近づいて彼らの安否を尋ねた。」

「ダビデはこの人たちに近づいて」とあります。ここにまず注意しましょう。川のそばにとどまっていた人たちが向こうからやって来たので、礼儀としてあいさつをしたのではない。ダビデのほうから身を乗り出し、走

り寄って、「お前たち大丈夫だったか」と、まるで顔をのぞき込むようにして案じています。ダビデは、この二百人の人たちのことをずっと気にかけていたようです。なぜこんなに心配したのでしょうか。ダビデは何を気にしていたのか。その事はまた後で触れたいと思います。

まずそのようにして無事を確認する。まずそれが最初にあつて、その次にダビデはこう宣言しました。「戦いに下って行った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。共に同じく分け合わなければならない。」そのような順序で話が進んでいます。

4 主が賜ったものだから

(1) 私たちが襲われた

ダビデが何を根拠にこのような判断をしたか、それについては 23 節でこう説明しています。「兄弟たちよ。主が私たちに賜った物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちに襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。」

ダビデは何度も「私たち」ということばを繰り返しています。「私たち」ということばに着目すると、三つのことが見えてきます。

一つ目。略奪隊に襲われたのは「私たち」だった。戦いに下って行った四百人も、戦いに行けなかった二百人も、略奪隊に襲われ、家族を奪われたという点ではみな同じでした。これはすぐに理解できるでしょう。これが一つ目。

(2) 私たちを守った

二つ目。略奪隊に襲われて困っていたとき、主はだれを守ってくださったのか。ダビデは

言います「主は私たちを守ってくださった。」つまり戦いに下った四百人はもちろん、荷物のそばにとどまっていた二百人をも主は守ってくださったとダビデは言っています。

「おや」と思いませんか。最後まで戦いに向かった四百人を主が守ってくださった、というのなら理解できる。しかしダビデは全員だと言う。どうしてそう言うのか、ちょっと理解しかねます。

先ほど、ダビデが荷物のそばにとどまっていた人たちに近づき安否を尋ねたことを見ました。ダビデが何を心配していたのか。その事についてはまだ触れていませんでした。

一つの例を挙げます。かつてイスラエルの人たちがモーセに率いられ、エジプトを脱出し、荒野を旅したときのことを思い出してください。エジプトを脱出した人たちは、全員が健康であったわけではありません。病気の者もいました。高齢の者もいました。障害を持っている者もいた。弱い人たちはどうしても集団から遅れていきます。ついていけない人たちがひとりふたりと落後していきます。そのひとたちどうなったか。アマレク人と呼ばれる人たちがまるでハゲタカのように弱っていた人たちを襲い、殺し、金品を奪っていった。荒野というところはそんなところなのです。弱った者が荒野にとどまるということはそれほど危ないことなのです。ダビデは戻って来るなり、まっさきに安否を尋ねたのはそのことを心配していたから。

ダビデは、全員無事だったと報告を受けました。ダビデはそこで確信しました。荒野に取り残された二百人をも主が守ってくださった。だから、主が守ってくださったのは、戦いに行った四百人は当然として、荷物のそばにとどまっていた二百人も同じく

守ってくださっていた。ダビデはそのことを見逃しません。

(3) 私たちに渡した

ダビデが見ている三つ目のこと。主は略奪隊をだれに渡したと言っているか。「私たち」です。「私たち」とは誰か。ダビデは、戦いに行った四百人はもちろん、行けなかった二百人も含んでいます。これは何を教えているのでしょうか。

ダビデのことから、神が何をご覧になる方なのかかわかってきます。神は、やったか、やらなかったか、成功したのか、失敗したのか、そのように結果だけを見る方ではありません。そうではなくて、神は私たちの思いを知ってくださる方なのです。できなかったことを責めるようなことはしません。むしろできなかったことを残念に思っている私たちのことを気遣ってくれる。具体的には、荒野の中で弱って動けなくなっていた二百人が無事に守られたのがそうだったのです。

自分たちは等しく家族を奪われた者だった。自分たちは等しく主の守りの中にあつた者だった。主は略奪隊を私たちに渡してくださった。すべては主が賜った物だったのです。だからダビデはこだわる。「共に同じく分け合わなければならない。」

この分捕り物は、六百人の間でだけ分けられたものではありません。もっと広い範囲の人たちにも送られていきました。その町や村の名前がたくさんありますが、すべてはダビデとその部下たちがかつてさまよい歩いたゆかりの地です。ダビデが困っていたときに、助けてくれた人たちのことを忘れていませんでした。

イエスはこう言われます。「あなたがたが

キリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです。」(マルコ 9:41)

ダビデを助けた人たちは、ほんのわずかのことしかできなかつたかも知れません。しかし主はその事を覚えてくださっていて、必ず報いてくださると語ります。

世の人たちは、できる者をほめたたえ、できない者を徹底的に無視していきます。そんな影響を強く受けていますから、私たちは教会の中にあっても何かをしなければいけないとあせったり、何もできないことを悲しんだりすることがあります。

でも私たちは安心してよい。主の恵みは、できる人にはもちろん、できなくなっている人のことも等しく注がれています。それが主の公平であるときよう語ってくださいます。

主の恵みを覚えていただきたいと願います。